

高次脳機能障害者支援・工房かたつむり(倉敷)

オンラインで 集団リハビリ

交通事故や病気が原因で、脳に後遺症が残る高次脳機能障害者を支援するNPO法人「工房かたつむり」(倉敷市西坂)は、オンラインを通じて専門家による集団リハビリを行っている。新型コロナウイルスの影響で、運営する作業所に講師を招いての開催は困難になったが、手法を変更して切れ目ない支援に取り組んでいる。(山内悠記子)

かたつむりは、高次脳機能障害者を中心とした中四国初の作業所として2004年、家族らが開設した。現在、記憶や言葉、感情の制御などがうまくできなくなる高次脳機能障害を持つ倉敷、岡山市の30〜60代の9人が利用し、社会参加に向けて軽作業などに取り組んでいる。

集団リハビリも活動の一環で、川崎医療福祉大(倉敷市松島)言語聴覚療法学科の教員や学生が週1回、事業所で開いている。昨春の緊急事態宣言の発令を受け、昨年3

コロナ下 切れ目なくサポート



月から半年間休止を余儀なくされたが、症状が悪化する恐れがあることから、昨年10月、ビデオ会議システム「Zoom」で作業所を結んでスタート。

5月16日からの宣言再発令に伴う休止をはさみ、今月2日から再開した。9日に開いたりハビリアは、同学科の時田春樹准教授が担当し、利用者7人が参加。准教授が準備

した多くの数字を印字したプリントを使って、30番台と70番台の数字に丸を付ける作業を通じて前頭葉を活性化するというトレーニングに取り組んだ。

受講した高尾晃正さん(39)「同市西坂」は「コロナ禍で人と接触する機会が少なくなっている。機能維持の訓練が続けられて本当にありがたい」と笑顔。時田准教授は「感染リスクが抑えられる上、定期的な様子を見守ることができるので私たちも安心。コロナ禍が収束するまで続けていきたい」と話す。

かたつむりの高尾明美所長(65)は「付き添う家族も情報交換したり悩みを相談したりできる。利用の輪が広がれば」と願っている。

川崎医療福祉大とオンラインで結び、脳機能を活性化させるトレーニングに取り組む利用者ら